

# 特別支援教育 実技・理論 研修会 終了報告

テーマ	「ことば」をアセスメントする	
日時	令和 5年 8月7日(月)	
会場	石狩教育研修センター	
講師	小野寺 基史 氏 (肩書:北海道教育大学大学院 教育学研究科教職大学院特任教授)	
参加者	35名	
研修会 の 様子		『「ことば」をアセスメントする』というテーマであったにも関わらず、約 3 分の1の参加者が言語部門以外からとなり、様々な先生が言語障害に興味を持っていることが分かった。アンケート結果を見ると、「正しいアセスメントを行い、その子に応じた指導を行っていきいたいと思う」「子どもへの声掛けをもっと気をつけていこうと思う」など、実践に生かそうという前向きな意見が多かった。
		前半は、サイレントベイビーの話題から始まり、社会的参照、選好注視等、乳児の能力や乳幼児期における保護者との関わりとコミュニケーションの大切さが説明された。子どもの全体発達に関するものが多かったが、ことばを育てるための3つの要素や子どもとの適切な関わり方(肯定質問、アイ・メッセージ、未来質問)、フィードバックの重要性等も盛り込まれ、概論から指導へとつながる内容となった。
		後半は、「ことばに関わる問題」「アセスメントから指導へ」という内容で、吃音や選択性緘黙等に関わる問題が取り上げられた。吃音指導における、入力・出力の実態把握や吃が生じない環境アセスメントとその構築、選択性緘黙が不安症に分類されている意味、解決思考型アプローチであるプリーフ・セラピーの有効性等の説明があり、示唆に富む内容だった。
		本講演は、言語・構音指導に関する詳細なアセスメント方法ではなく、全体発達の中で、ことばをどう捉え、子どもたちをどのように支援していくかを主眼とした内容となった。そのため、言語障害それ自体のアセスメントの重要性と共に、児童・生徒への適切な関わり方や特性に応じた環境調整の重要性を再認識する機会となり、ことばのアセスメントを全体発達の視点で捉えることの大切さを学ぶ良い機会となった。
		質疑応答では、サイレントベイビーとして育てられた子どものリカバリーは可能か、選択性緘黙に関する有効なアセスメント手段には何があるか等、講演内容に関する質問や、簡潔に分かりやすく保護者に説明する言葉、言い誤りが固定してしまった児童のアセスメント方法等、言語指導に関する具体的な質問が寄せられた。本講演全体を通して、言語アセスメントについて振り返る有意義な時間となった。